



Save The Earth

地球温暖化について

大

気中に二酸化炭素の濃度が増えると温暖化が進みます。温暖化が進めば海水の温度が上昇し、空気中の水蒸気の量が増えます。熱帯低気圧のエネルギーのもとは水蒸気だから熱帯低気圧の発生数が増加することになります。台風は何處で生まれ日本にやって来るのか回数も増えます。

台風のものと異なる熱帯低気圧はミクロネシア海域の主に海水の温度27℃以上の海域で発生します。太平洋西部の北緯5°～25度付近の海域で北東貿易風の強い所です。この貿易風は時々波動(偏西風波動)を起こします。またこの付近には南半球からの南西風がぶつかって来る赤道収束帯でもあるので波動が発達して渦になるところが熱帯低気圧の発生ということがあります。海面の温度が高いのに低気圧が上昇します。水蒸気を多量に含んだ空気が上昇すると気圧の低下(断熱膨張)により気圧が下がります。気温が下がると湿度が過飽和状態になり、水蒸気が凝結し霧を生じます。つまり雲が発生します。雲は液体だから気体が液体に変わる時には潜熱(気化熱)を放出します。気化熱は水1グラムについて600カロリーもあります。上昇した空気中の水蒸気

も1グラムについて600カロリーもの熱を放出すると、その空気の塊は周囲の空気より温度が高くなります。温度が高くなると更に上昇を続けます。渦の中の空気が上昇すると下から湿度の高い空気が次から次に上昇して渦はだんだん大きくなっています。その場合のエネルギーは水蒸気の持つ潜熱(気化熱)だから海水が燃料の役目をするので、海水がある限り燃料は尽きないとということになります。

台風は海上で発生し海上にある時は工エネルギー源である水蒸気がつづりと補給されるのでなかなか衰えませんが、陸上に上がると水蒸気の補給が絶たれるので間もなく衰えてしまいます。

北半球にできた渦は地球自転による転向力(コリオリの力)のために上から見て左回りになります。断熱膨張によって雲を生じ、どんどん上昇しますが、対流圏の最上部(高さ10数キロ)まで達したら四方へ分散します。台風の直径は1000～5000キロくらいですが、伊勢湾台風のような大型台風は1000キロを超えるものもあります。台風はもともと熱帯低気圧ですが、風速が増すと西部北太平洋では台風(タイフーン)、東部北太平洋と大西洋ではハリケーン、インド洋や南太平洋で

はサイクロンと呼んでいます。台風の場合風速が毎秒17.2メートル以上になると台風と呼ぶし、それ以下の場合は弱い熱帯低気圧といいます。ハリケーンの場合毎秒33メートル以上をいつてるようです。

左回りのらせん状の中心に収束している空気は遠心力のために空気が薄くなり、それを埋め合わせるために逆に中心付近では下降気流を生じます。空気が下降すると断熱圧縮により気温が上がり不飽和状態となり、空が見えることもあります。これを「台風の目」と言つて円形で直径20～200キロと大きさはさまざまです。

大きい台風の目が大きいとは限りません。

強烈な台風の目ははつきりして

いて見え易いようです。

歴史調査の楽しみ方

志口永城跡

1

大田幸博

(元・菊水町史編纂委員会副委員長)

日

平城跡の調査を終えて、3月から現地に入りました。この城跡は、文献に記録がないものの、丘陵地の張り出し部分に残る「城の尾」の字名から、存在を知ることができます。地籍図を見ると、当地は、高野地区にあります。しかし、城跡と関係の深い集落が、志口永地区なので、町教育委員会は、これに沿った形で、命名しています。

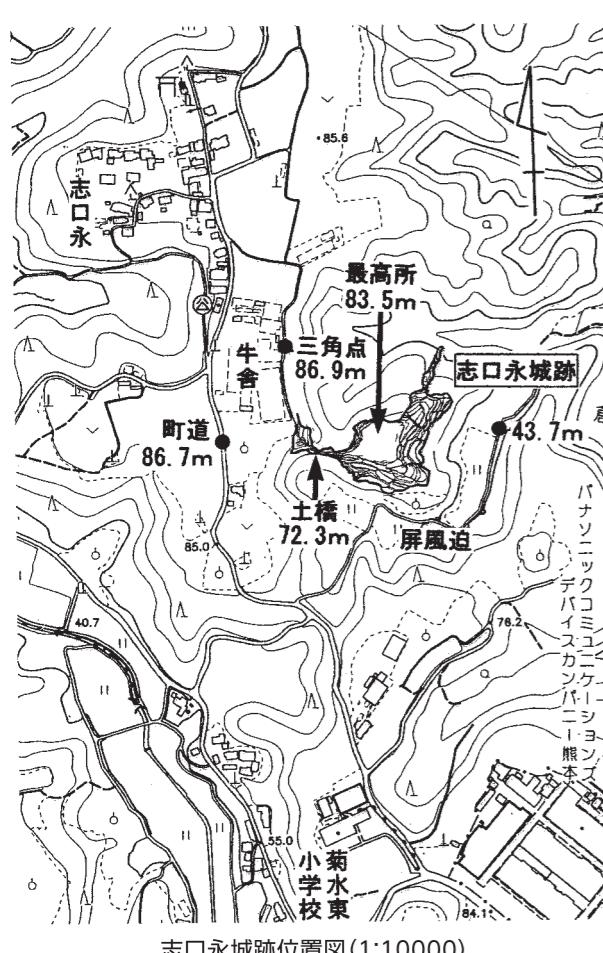
【所在地】 高速道路の菊水インターから、県道玉名・山鹿線を山鹿方面へ約3km進んだ所に、菊水東小学校の校名標柱があります。これを左折して町道に入り、パナソニック熊本工場と小学校通り過ぎると、丘陵の上に出ます。集落は、北側区域に、まとまって展開しており、南北区画に、広い敷地の牛舎があります。特筆すべきことは、城跡の場所です。

実際は、牛舎の東南東側に存在していませんが、丘陵縁に植栽された杉木の並びもあって、城跡が望めません。普通、城は、集落近くの目立つ所に選地されるので、極めて特異なケースになります。

【地区名】 志口永村は、江戸時代・前期

特に、「城の山」とも呼ばれる城跡の中、牛舎敷地内の三角点(86.9m)よりも3.4m低くなります。城跡が、丘陵の本体より低いのです。

特に、「城の山」とも呼ばれる城跡の中、牛舎敷地内の三角点(86.9m)よりも3.4m低くなります。城跡が、丘陵の本体より低いのです。



志口永城跡位置図(1:10000)

の検地帳に「鮎永村」と表記されています。有明海で「ぼら」に良く似た「しきうち」という魚が捕れたことで、村名に当て名したものとされます。しかし、この地は、海とは無関係の所で、不思議な気がします。

【縄張り】 町道の標高は、86.7mで、丘陵線の牛舎の隅から、城跡へ通じる登城道が下っています。瘦せ馬の背中のように、極端に括れて「屏風迫」と呼ばれる所です。丘陵本体と、城跡を繋ぐ道で、谷部を通る部分は、土橋になっています。土橋の最も低い所は、標高72.3m、道幅も1m弱で、それから登り坂になります。土橋は、長さ13.5mで、登城道は全長88mに達します。これ程の規模のものは、他の城跡で、類例を見ません。重要遺構ですが、土砂崩れにより、年々、土橋が痩せていくのが、気がかりです。

城内の最高個所は、標高83.5mですかね、牛舎敷地内の三角点(86.9m)よりも3.4m低くなります。城跡が、丘陵の本体より低いのです。

下位の崖面(高低差18.4m)は、すべて直の絶壁で、縁に立てば、足がすくみます。「天然の要害」とは、このことであります。さらに、平場は、南北側に1条と北東側に2条の張り出し区画があり、いずれにも、造成の痕跡があります。

縄張り的には、江田地区の「小乙城跡」に似ていますが、城跡と集落の関係からすれば、大きな違いがあります。志口城跡は、小規模ながら、非常に魅力のある城跡です。